
ヴァルキリーズ・ストーム外伝 精靈体達は大忙し！前編

鷹嶺綺羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヴァルキリーズ・ストーム外伝 精靈体達は大忙し！前編

【NZコード】

N4633E

【作者名】

鷹嶺綺羅

【あらすじ】

メサイアの擬似人格“精靈体”彼女たちは以外と大変なんです。ある日の出来事を書いてみました。

「俺に文句言うなよ」

睨み付けてくる美奈代に、都築は困り切った顔で言った。
「ありや事故なんだからさあ」

「うわあああんつ！」

都築達の目の前。ハンガーデッキに収容されたメサイア“鳳龍”。
そのMCLで散々泣き叫ぶのは“鳳龍”的精靈体“十六夜”だ。
泣き叫ぶだけではない。

MCLの全ハツチだけでなく外部の全アクセスまでをロックして
しまい、実質的な引きこもりに入ってしまっているのだ。

整備兵が万一一に備え、騎体のメインパワー・ケーブルを抜いて使用
不能にする中、“鳳龍”的MCLにして十六夜の名付け親でもある椿
蓮少尉他、精靈体調律士、整備兵達がMCLのハツチにとりついて
説得に当たっている。

十六夜が応じる様子は全くない。

「ハツチをバラしても、肝心の十六夜が出て来る可能性は低い」

“鳳龍”的様子を眺めながら、宗像は言った。

「精靈が動かなければ、メサイアだつて動かない」

「一体、何したの?」さつきも半分あきれ顔だ。

「何? 十六夜ちゃんイジめたの?」

「いや……」

都築は苦い顔をした。

「何があつた? 演習中に墜落仕掛けた挙げ句、精靈体の全システム
が停止。稼働不能に陥つて不時着したと聞いたぞ?」

「……ブースターの推進バランスを騎体側で違えたせいでの、あやつ
く大惨事になるところだった」

「何？」

「小学校に突つ込むところだつたんだよ」

「お前の操縦ミスじゃないのか？」

「宗像……いくら俺でも高度8千から錐もみで墜落する趣味はないぜ」

「……アホ」

白い目の美奈代が諭すように言つた。

「精靈体達は精靈体達で必死だ。それがわからないわけじゃないだろ？？その手の調整は精靈体やメサイアだけのせいじゃない。察するに貴様の調整が不十分なんだろうが」

「……だから、俺は十六夜にそう言つたぞ」

都築は憮然として口をとがらせた。

「だけどさ？十六夜はもうパニックだ。俺だつて騎体をねじ伏せて回復させるのが精一杯なんて事態に陥れば、自分の調整ミスだつて疑う」

「賢明だな」宗像は腕組みしたまま頷いた。

「少しさは成長したようだ」

「言つてろ……多分、校庭で呆然とこつちをみつめていた、自分と同じくらいの子供達。それを一歩手前で殺しかけたことに、十六夜も傷ついたんだろうな」

そう呟く都築は頭を搔いた。

「だからといって、俺にどうしろといつんだ！？俺はいつから幼稚園に就職したんだ！？」

「自分の失敗で落ち込む娘を励ます父親 の方が正しい気が」

「俺は子供なんていらん」

ガツ！！

「……OK。泉、時に落ち着け。まだ子供はいらない。そう、まだ、だ

「命拾いしたな」

拳銃をホルスターに戻した美奈代が都築を突き飛ばした。

「都築さん、それで十六夜怒らなかつたんでしょう?」

「当たり前だ」

山崎の質問に、都築は憮然として答えた。

“‘はじめんなさい’って泣きじゃくるからさ~お前一人の責任じゃないつて言つた”

「それでも、十六夜は……ああなつた」

「ああ。ビービー泣き出したと思つたら、そのまま騎体の中に消えた」

「……で、どうするんです?」

「美晴。手があるなら教えて欲しい」

「とりあえず」

美晴はハンガーに並ぶメサイア達を見上げた。

「精靈体達に説得を頼みましょ~」

「いいか、都築」

美奈代は自分の騎体の「クピット」に潜り込みながら、ついてきた都築に言つた。

「十六夜の機嫌を直す」ことを最優先。何を要求されても飲め。いいな?ここで“鳳龍”を失うわけにはいかん

「……わかつてる」

都築は半ばヤケ気味に言つた。

「土下座でも袋叩きでも……好きにしろよ。俺が操縦ミスつたせいだつていいたいんだる?~」

「貴様は」

その投げやりな態度がカソに触つた美奈代の額に青筋が浮かんだ。

「本当に、十六夜と仲直りしたいと思つてゐるのか?」

「そりや……

「どうなんだ?」

「……し、したいを」

都築はそっぽをむいた。

「ただな？あんなガキに頭をさげるのせどりこも恥ずかしい」

「……ガキは貴様だ」

「もう少し、放つてあげればいいと思つよ？」

美奈代騎の精靈体“さくら”はそう言つた。

「コントクトとつたけど、泣いちゃつて大変。私達の説得にも耳貸さないもん」

「どうにもならないか？」

「もう少ししたら、都築さんから、何かあげればいいと思つ」

「何か？」

「うん」さくらは自信満々に頷く。

「十六夜、「何か欲しい」つていつも言つていていたから

「……なんだ？」

「忘れたけど

「うーん。何だっけ？」

さくらは腕組みして首を傾げる。

子供が精一杯背伸びしているようなさくらの仕草に、美奈代は思わず口元をゆるめた。

「とりあえず、思い出したら教えてくれ」

美奈代に頭を撫でられたさくらは嬉しそうに頷いた。

「うんっ。他の子達にも聞いてみるね？」

「ああ」

頷いて、美奈代は思いついたように訊ねた。

「で？さくらは、欲しいものは無いのか？」

「私？」

「そうだ いろいろ世話になつてて、私の手に入るもの

でよければ

「考えてとくつー！」

「というわけで」

深夜。人気の少なくなったハンガーテックの宙で、メサイアを抜け出した精靈体達が顔を揃えていた。

皆、外見が幼いため、端から見れば幼稚園の集まりのようだ。

「十六夜をどうやつたら説得出来るか意見を聞きたい」

仕切るのは宗像騎の精靈体、涼だ。

「かつてに仕切らないでよ」

それが面白くないという顔で、さつき騎の精靈体、紗々（しゃしゃ）が口をとがらせた。

「まあ……十六夜、都築さんのこと好きだから」

訳知り顔は美晴騎の精靈体、夏姫。

「いつだつて都築さん都築さんで頑張つてきたのに、あらうことか都築さん殺しかけちゃつたんでしょう？……傷ついたんでしょうねえ」

「そうつー」

夏姫はこじぞとばかりに怒鳴つた。ポニー・テールにまとめられた髪がたてがみのようになだれられた。

「でも、それを上手く慰められない都築さんも悪いつー！」

「女の子の心がわかんないなんて、都築さんつて最低つー！」

「そうよねえーつ！」（×9）

「ど、とはーえ……このままじゃ十六夜、分解されちゃう

怖がるのは、山崎騎の精靈体、アルト。

山崎お手製のゴテゴテ飾り立てたゴスロリドレスを身に纏い、やたらと浮いている。

「再構成送りは絶対阻止しなくちゃね」

アルトのドレスと、自分の白いスマックを比較し、小さくため息をついたさくらは、皆の最大の心配事を口にした。

人格に問題があると認められた精靈体を持つエンジンを解体することを指す。

精靈体とエンジンは不可分の存在であるため、これをやられた精靈体は消滅し、エンジンの組み直しによって、別な精靈体が生まれることになる。

精靈体にとつて、いわば死刑。

精靈体が最も恐れる措置だ。

「そんなことされたら……十六夜、浮かばれない」

「さくら、殺すな。乃衣姉、何かいい案でも？」

長野教官騎の精靈体、乃衣が腕組みして考え込んでいる。製造されたのが最も古いため、周囲の精靈体より若干年上に見える。

金髪に瑠璃色の瞳を持つ、皆にとつて頼れるお姉さん的存在だ。

「うーん……とりあえず、みんなで慰めてあげて、十六夜の要求を

聞きましょう」

「聞いて、マスターに報告して」アルトが頷く。

「マスター達が拒否したら」さくらも同様。

「反乱」(×7)

「それでいいか」涼が皆の意見をまとめる。

「面白そう

「やつちやおう」

「ちょっと！」

青い顔で立ち上がったのは、一宮教官騎の精靈体、鈴^{りん}だ。

ツインテールの髪とつり上がった猫目が特徴的だ。
黙つて聞いていれば、好き勝手言い放題！

「うるさいわねっ！」

涼が怒鳴った。

「万年未経験の耳年増は黙つてなさいっ！」

「なつ！？じ、実戦経験はピカイチよっ！」

まるで猫が毛を逆立てたように鈴はくつてかかった。

「恋愛経験は永遠にないでしょっ！？」

「人のこと言えるかあっ！」

「ちょっ！」

「やめなさいよっ！」

「痛っ！やつたわねえっ！？」

「……もう、大騒ぎだ。

それから10分後。

ボコボコされ、正座させられている精霊体達を前に立つのは、一人の妙齡の女性。違う。精霊体だ。

つややかな髪。整った顔立ち。人間離れした美貌を誇るボテージ姿の精霊体。

“鈴谷”の精霊体 “美鈴”
みすず 別名、美鈴姉さんだ。

「……………で？」

美鈴は、正座する精霊体達に訊ねた。

「つまり、十六夜がドジって、凹んでいるってわけ？」

「……………です」

と、涼が呟くように言った。

「アア、ツー？」

「ビュツ！」

涼の目の前に振り下ろされたのは精神注入棒だ。

「聞こえねえよー涼、何つた！？」

「で、ですから……そう、です」

「声がちっさいっ！」

「そうですつー！」

「そうですつー！」

「……つたく」

美鈴はため息混じりに言つた。

「私もさあ……そりやいろいろやつてきたけど
ガンツ！」

精神注入棒が床を叩いた。

「こんな！バカみたいな話は初めてだわ！」

「……」

「……」

精靈体達が互いの顔をちらちらと見合つ。

誰よ。姉さん呼んできたの

私じゃないわよ

そんなやりとりに気づかないのか、美鈴は続ける。

「ここが私の中である以上、私がこの話ナシまとめなくちゃいけないわけじやん？」 これで

精神注入棒が振り上げられた音に、精靈体達がビクツと小さい体をすくめた。

「十六夜が再生送りなんてなつたら……あれよ。私のメンツ丸つぶれつてわけさ。 あんたたち、この私の顔に泥塗るつもり？」

「い……いえ」

「ならさあ」

美鈴は涼を抱きしめながら言つた。

「あんた達、責任もつて十六夜慰めて元に戻しなさい

しぐじ

れば」

涼を抱きしめる力が強まる。

「わかつてんんだろうねえ？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4633e/>

ヴァルキリーズ・ストーム外伝 精靈体達は大忙し！前編

2010年10月8日14時19分発行